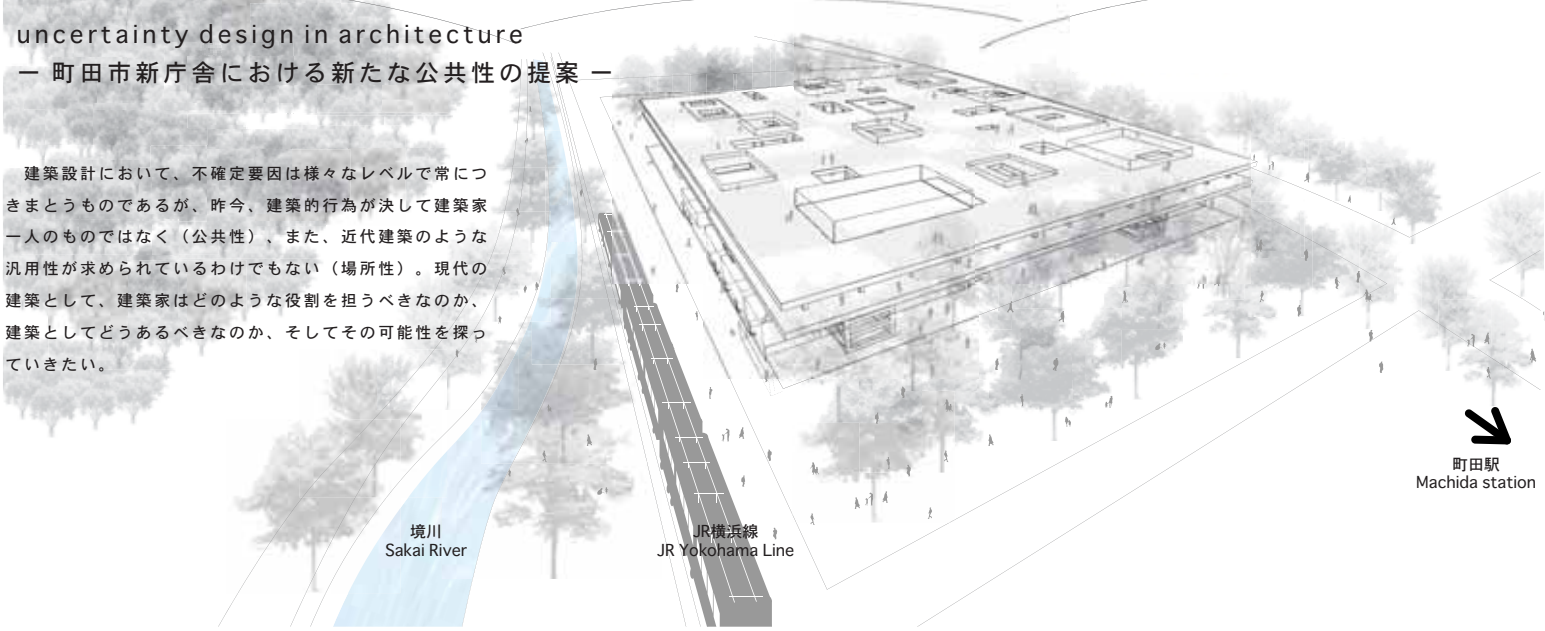


不確定さを享受する建築

uncertainty design in architecture

— 町田市新庁舎における新たな公共性の提案 —

建築設計において、不確定要因は様々なレベルで常につきまとうものであるが、昨今、建築的行為が決して建築家一人のものではなく（公共性）、また、近代建築のような汎用性が求められているわけでもない（場所性）。現代の建築として、建築家はどのような役割を担うべきなのか、建築としてどうあるべきなのか、そしてその可能性を探ってきたい。



設計概要

/ design concept

不確定性を考慮し設計された建築の多くは、フロアを開放したり、多様なプログラムへ対応可能なデザインになっており、空間的に対応可能な状況を創りだしているが、実際にはパブリックスペースが切りつめられることでしか解決できていない。そこで、モノをおさめるスペース（物理的フレキシビリティ）とアクティビティをおさめるスペース（絶えず変化するパブリックスペース）の二者を明確にわけて考えた。前者としての事務機能を大架構で大屋根のように浮かせ、市民活動機能を大地に接着させる。後者としての協働空間は、これら成熟期を迎える市民参画という試みにあって、ユーザーとともに成熟していく空間の骨格としての建築の形式を提案する。



背景 / background

1: 近代から現代へ

“機械を道具として活用する社会”から“都市そのものを機械”へ、そして巨大な商業機械へと複雑化され、建築家さえもいつのまにかその機械の一部に呑み込まれ商品化される時代のようなものである。

2: 不確定さということ

・社会、経済的意義として

近代社会において市民が期待された市民的公共性が、実際は市民代表としてのブルジョワジーの政治的判断にすぎず、民主主義のフィクションであった。一方、現代社会において“公共=官からの脱却”、“分節化した市民・市民組織の発意の集合”のような試みが見られるが、新しいフェーズの公共性を表徴・具現するものとして「再構築」すべきである。

・現代というスタイルとして

現代建築は、未だ近代の規範の中での出来事であり、スタイルとして確立されたものではない。しかし、どんな条件下でも一貫性のあるスタイルを確立しようとする伝統的な姿勢が必要なのだろうか？市場の進展や消費の加速、公共性による第三者の存在により、スタイル面での一貫性を持たせることは効果的ではない。どんな環境においても自らのアイデンティティを失うことなく経験や知識を転写し、それぞれの環境に応じてアイデンティティを再定義することを可能にする建築の骨格が必要である。

敷地 / site 東京都町田市

庁舎建設用地は、町田バスセンターから約700mの距離に位置する。鉄道駅を含めた交通結節点からの距離は現庁舎とほぼ同等であり、徒歩で訪れることが可能である。



市庁舎 / city hall

地方分権一括法が平成12年に施行され、この法律の目指すところは地方自治の確立で、明治維新、戦後改革に次ぐ第3の改革といわれ、住民が自主的にまちづくりなどの仕事をきめることができ、国、都道府県、市町村の役割と責任が明確になり、縦割り行政にしばられずに地域の実情にあった個性的で多様な行政が展開でき、

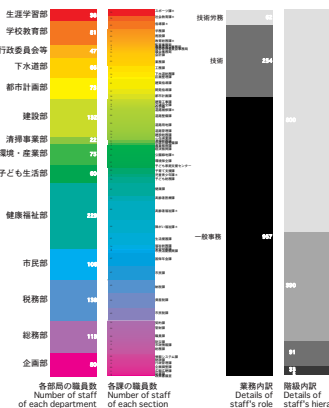
国の地方自治体に対する関与が必要最小限になり事務処理等が簡素化できる、とされている。

一方で住民の求める行政需要は多様化高度化し、少子・高齢社会への対応、高度情報化社会の実現は地方公共団体の役割に変化を求め、行政サービスが肥大化する傾向がある。また、長期にわたる経済社会の低迷は、地方税への依存度が高い地方公共団体の財政を圧迫、硬直化させつ

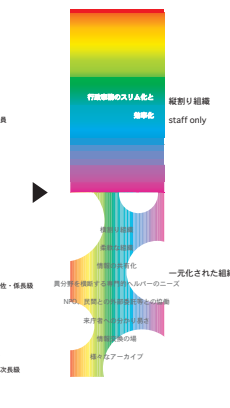
つある。時代の変化に柔軟に対応できる創造的かつ効率的な建築が求められる。

このように庁舎というプログラムは、不確定性を多く含むと思われる。

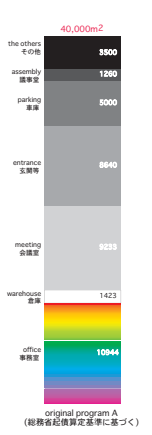
現在の組織構成：細分化された縦割りの組織は、虹の部分の色を言い当てるようなものである。（市民にとっての分かりづらさ、行政業務の複雑化）



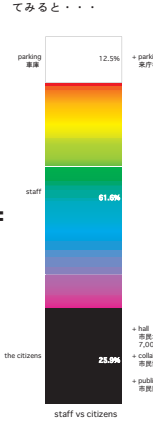
将来的ニーズを考え、予測可能な縦割りの組織（具体性）と、予測不可能な横割りの組織（柔軟性）に分ける。



求められる機能規模の分析



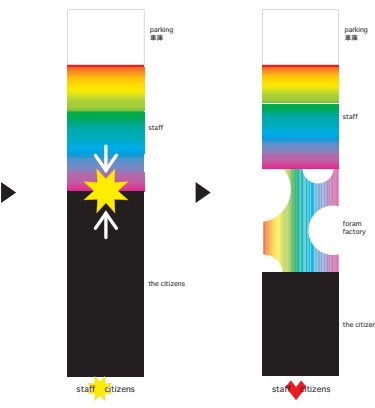
職員の空間と市民の空間に分けてみると・・・



市民に対する規模の見直しと、市民の集まる場としての理想



フロアの開放、多様なプログラムの対応は空間的に対応可能だが、パブリックスペースが切り詰められるという現実



5つの要素 / 5 elements

01 大屋根オフィス/事務スペース



02 吊床/立体的フレキシビリティ



03 やぐら/人と光の縦動線、設備コア



04 Mixing Factory/協働空間

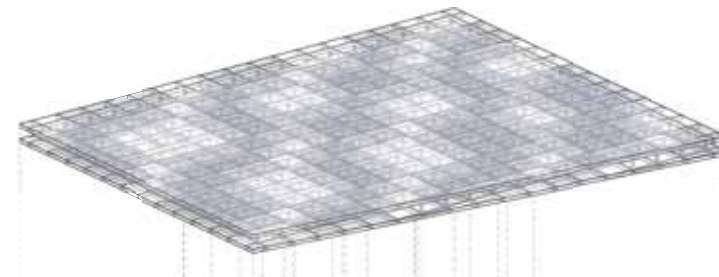


05 丘のリビングルーム/市民活動空間



この建築は、5つの要素によって構成される。

これから成熟期を迎える市民参画という試みにおいて、ユーザーとともに成熟していく空間の骨格を創る。そのような建築の形式を提案する。



大屋根（フィーレンデルトラス）

フィーレンデルのトラスにより、水平な大平面のオフィスを梁せいとして、大屋根を浮かせ、下の空間をスムーズでフレキシブルにする。

また、面剛性を高めるため千鳥格子状に面を堅め、その下の大空間と自由なヴォイドを可能にする。

大きな屋根面、いろんな庭

屋根面は、千鳥格子状に分割された面ごとに異なる庭を設定し、建物の環境負荷の軽減する。また、市民の啓発的効果、市民が居場所を見つけられる公園のようなものになる。それぞれが、やぐらと連結することで、下部とも連携した環境システムが可能である。

また、大きな屋根面は市民が自然と集える場のイメージである。

吊り構造

大屋根のオフィスから床を吊るすことによって、立体的なフレキシビリティを目指した。増床も可能であり、下の空間との物理的な距離を縮める。

やぐら構造

大屋根オフィス（フィーレンデルトラス）は、13本のやぐらによって支えられる。約30mの大スパンにより、下の空間をスムーズでフレキシブルにする。

地震力には、やぐら回りの壁に制震ダンパー（アンボンドブレース）を組み込むことで、耐震安全性を確保する。△

また、やぐらは人やモノの縦動線であり、また、トップライトから自然光を地下まで届け、室内環境を整える設備コアでもある。

柱無空間 / 絶えず変化するパブリックスペース

オフィスと市民活動スペースの間にできた空間が、mixing factoryという、不確実性を受け止める柔軟なフロアで、絶えず変化するパブリックスペース。

やぐら以外の柱が全く現れることのない完全な柱無空間となる。

役所に加え、NPOや民間企業など市民が参加して、作り上げてゆく場所。全ての手続きがここで済む。

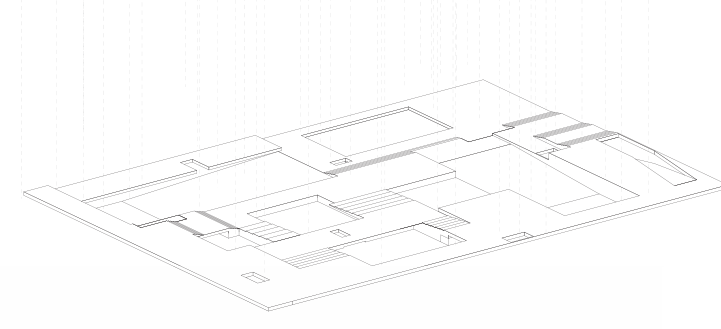
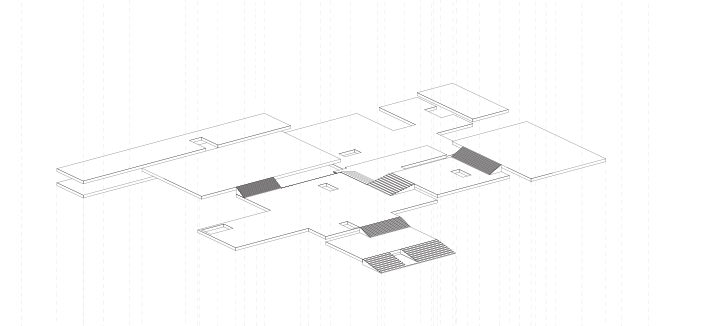
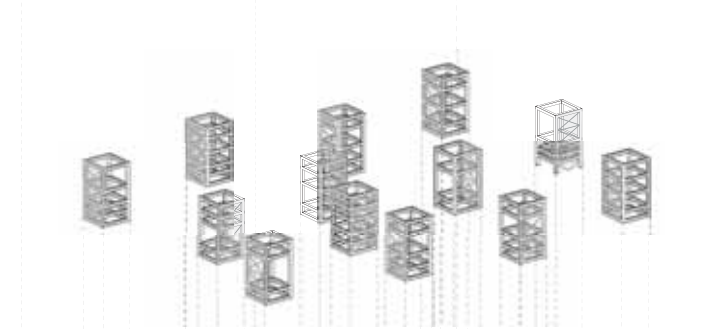
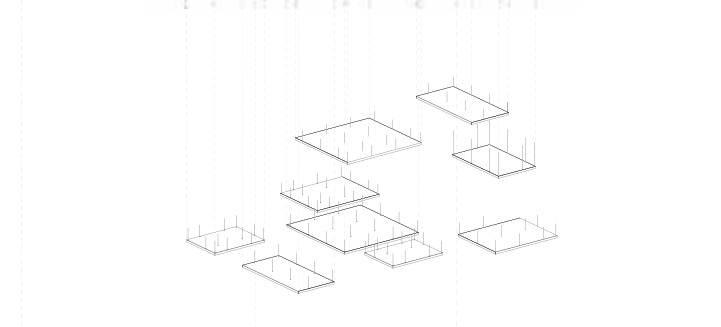
下部構造（RCラーメン造）

市民活動スペースは、RC造のラーメン構造（スパン8m）とする。町田は谷戸地形であり、かつての河岸段丘のように床面を設定する。

ここは、市民が自然と集うリビングルームのような場所である。

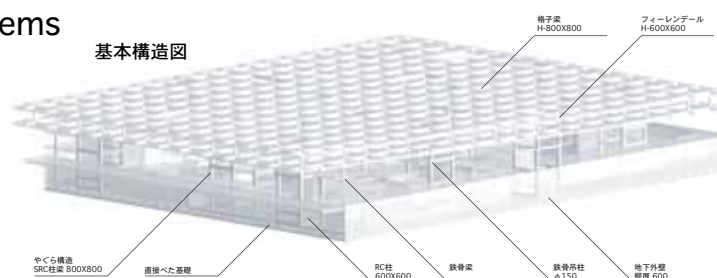
基礎構造

敷地にはGL-5-9mよりN値50以上の砂礫層が存在する。従って、経済合理性より支持地盤はGL-7mとする。地下階には厚さ600mmの地下外壁を設け、十分な下部構造の耐震性を確保する。



構造計画 / structure systems

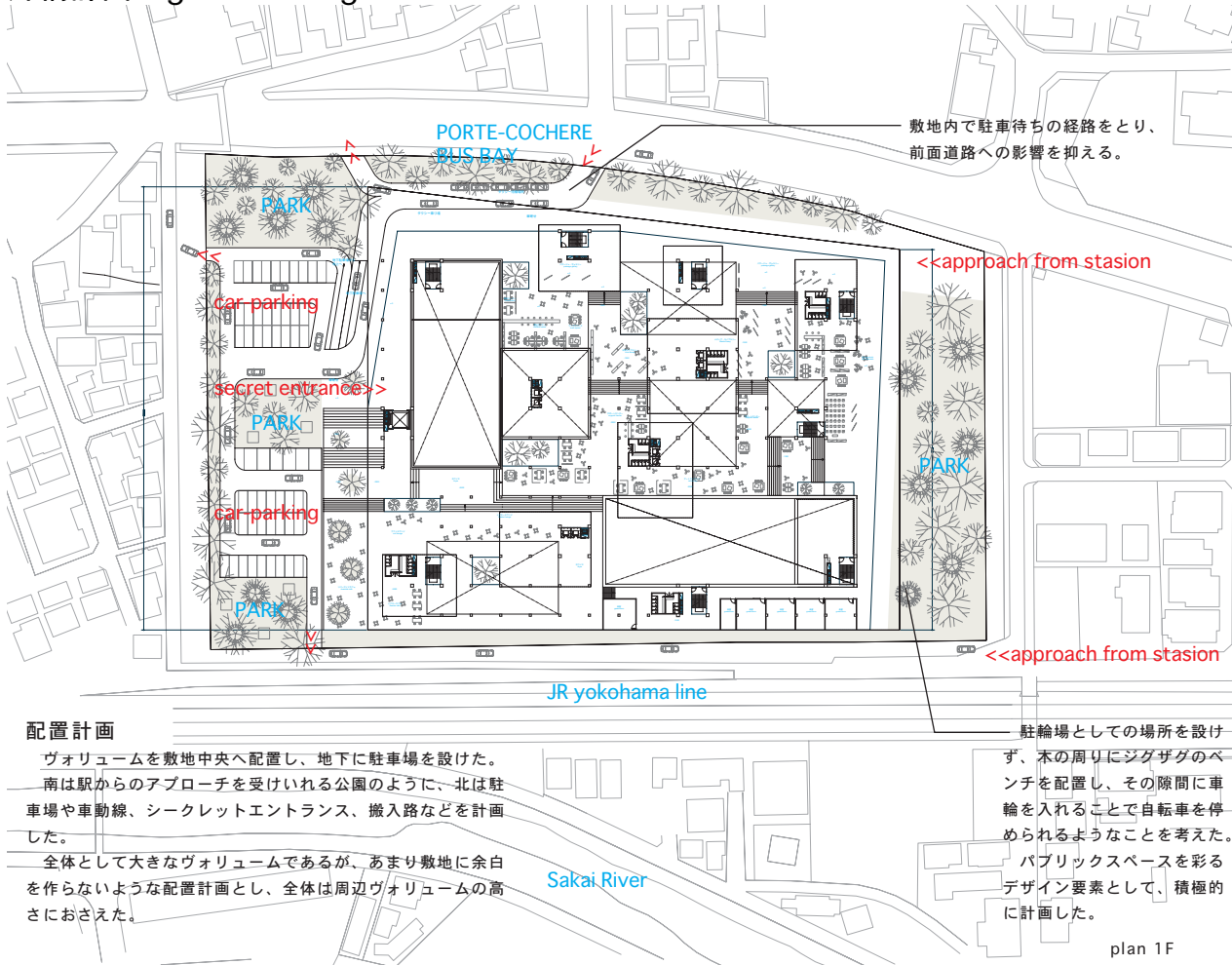
建物は、人工的に形成された地形と、宙に浮かんだ大平面の大屋根（office層）で構成されている点に計画上的の特色がある。そして、それらに間にできたスムーズでフレキシブルな空間が重要であり、これらの建築計画に対応する合理的な構造計画として、このような構造方式を提案する。



基本構造図

やぐら構造 SRC柱梁 800X800 直接べた基礎 RC柱 600X600 鉄骨梁 鉄骨吊柱 φ150 地下外壁 厚さ 600

外構計画 / ground design



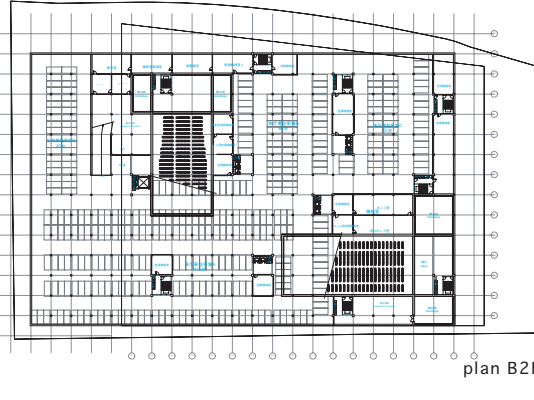
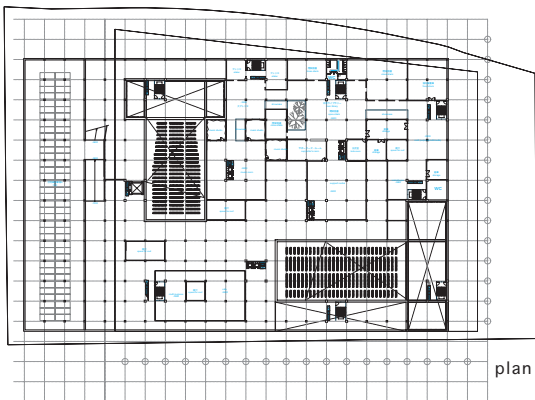
配置計画

ヴォリュームを敷地中央へ配置し、地下に駐車場を設けた。南は駅からのアプローチを受け入れる公園のように、北は駐車場や車動線、シークレットエントランス、搬入路などを計画した。

全体として大きなヴォリュームであるが、あまり敷地に余白を作らないような配置計画とし、全体は周辺ヴォリュームの高さにおさえた。

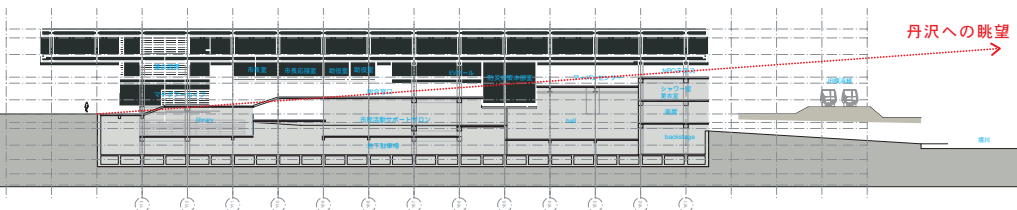
駐輪場としての場所を設けず、木の周りにジグザグのベンチを配置し、その隙間に車輪を入れることで自転車を停められるようなことを考えた。パブリックスペースを彩るデザイン要素として、積極的に計画した。

plan 1F



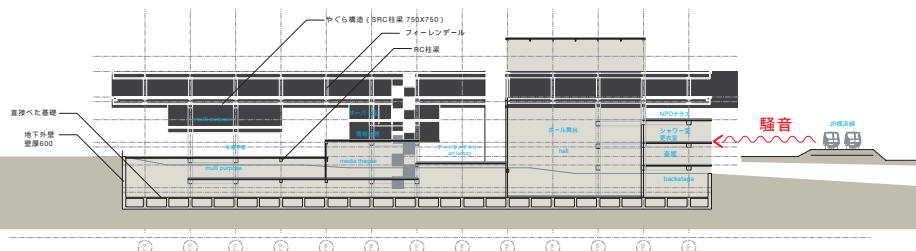
丘の先の景観

市民協働スペースは人工的な地形によって、JR横浜線の上部レベルまで連続する。その地形の延長上には、丹沢への眺望へと連続する。

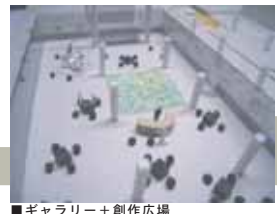


防音計画

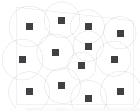
敷地の隣を走るJR横浜線はラッシュ時には4-5分に一度のペースで列車が通り過ぎ、その際の騒音は大変大きなものである。そこで、オフィス層はダブルスキンとし、横浜線側には、楽屋や更衣室、シャワー室、倉庫などで列車上の高さまで構成した。



シークエンス



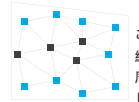
環境計画 / environment systems



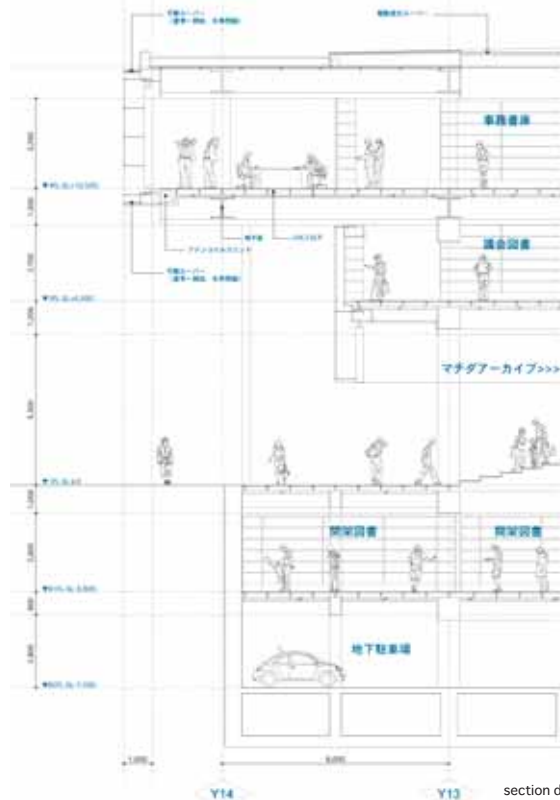
約30m間隔で配置されたコアは、大平面を空調ゾーニングとして分節する。



コアの間にヴォイドを挿入することで、コアと同様に30m程度の間隔で配置される。よって、中間期の自然通風が可能であり、夜間の空気を取り入れたりすることも可能になる。コアとヴォイドが等価に扱い、サマーパティオとウィンターパティオのような環境効果を狙った。



避難動線を外周部の各コアに配置することで、大平面の空間でも2方向の避難経路を拓くことができる。また、外周部に逃げればよいという意識は、混乱した災害時には非常に有効である。



■マナダアーカイブは地域の情報庫。



■フロアの中央にはcity hall hub。



■ここでは全ての手続きが可能



■進行中のプロジェクトの公開広場



■議員と市民の交流サロンなど



■気軽に議会の様子を傍聴



■様々な変化に対応可能な大屋根オフィス

